

I'M A LEWD SAINT, PLEASE HOLD ME...

淫魔のイケメン王子に

執着されて聖女なのに

快樂墮ち

しちゃいました♡♡♡

～何度も連続絶頂&生ハメ中出しされてイキ狂っちゃいます～

ソフト拘束、濃厚キス、手マン、鎖骨&脇キス、乳首責め、言葉責め、クンニ、クリ責め、 spanking、焦らし、連続中出し、キスハメ、体位×3種、ハードセックス→ラブラブセックス♡♡♡

淫魔のイケメン皇子に執着されて聖女なのに快樂堕ちしちゃいました〜
何度も連続絶頂&生ハメ中出しさせてイキ狂っちゃいます〜

見惚れるほどに眉目秀麗な淫魔族の若き皇子アルカードが貴族風の衣装をまとい、私を見下ろしていた。

この身は王族が広く豪華な部屋の壁に貼り付けられ、身動きが取れない。
い。

両足は自由になるものの、両手を頭上で縛り付けられていた。

「ようやくお前を手に入れることができたぞ、聖女よ」

艶やかな黒髪が印象的な皇子は満足げに笑った。

吸い込まれそうな瞳で見つめられると、胸の鼓動が速くなってしまう。顔も熱くなっている気がする。

でも、彼は魔族だ。

完璧な造形をしているとも言われるアルカードの容貌に胸を高鳴らせたりしない。

私は聖女なのだから――。

「貴方のモノになった覚えはありません。私を早く王都へ帰してください」

「魔族の王城でも誇り高き精神は変わらずか。好ましいぞ」

私は悔しくて拘束を破ろうとするも、ぶよぶよとしたスライムが両手首を固定し、頭上よりも高い位置で壁に貼り付いてるから逃げられない。着ている白いローブはぼろぼろで露わになっている太ももを隠すこともできなかつた。

その太ももを見て、アルカードがいやらしく笑つた。

「オレはお前を墮とす。オレと契りを結び、お前は淫魔の姫となるのだ」

「お断りします！ 誰が貴方となんて……！」

「兵士に絶大なチカラを与える聖女がこちら側につけば魔族は安泰だからな」

聖女となった私の能力は、人間の兵士を強化すること。

普通の兵士が数十人集まって、やっと魔族の一体倒せる程度だけど、私が支援魔法をかけると全ての兵士が一騎当千となる。

ひとりの兵士が魔族を倒すことだつてできるようになる。

つまり、聖女は魔族と人間の戦いの勝敗を決める力を持っていた。

「私には王都に大切な人がいます」

王都の守護を司る王国騎士団の副団長であり、第二王子のルーカス様。

私は聖女だから結婚はできない。

けれど、世の争いが鎮まれば聖女の役目を終えることができる。

——平和になったら結婚しよう、聖女殿。

そう約束したのは、ほんの数日前。

聖女に選ばれてからずっと私を支えてくれた大切な人。

この身の全てを捧げても、まだ足りないくらい愛している。

なのに、目の前にはルーカス様ではなく、人に仇なす淫魔の皇子がいる。

「お前の大切な人だと？　それは誰だ？　そんなヤツがいるのか？　お前の心の中に……？　まさか、もう抱かれたというのか!？」

「結婚の約束を交わしましたが純血は守っています。き、キスだっただけだ——」

「……そうか」

アルカードは心から安堵したように息を吐いた。

私は魔を払う聖女となってから魔物の知識を叩き込まれている。

けれど、淫魔がひとりの乙女にこだわるなんて聞いたことがない。

多くの女性をとつかえひつかえしてハーレムにするのが彼らのやり方のはずなのに。

「……よかった。お前は清らかな処女おとめなのだな」

先ほどとは違い、安堵したような優しい笑みを浮かべる。

匂い立つような色気のある彼がこんな風に笑うなんて――。

胸がとくとくと鳴った気がした。

――違う。

私の身も心もルーカス様のもの。

なのに今、淫魔の皇子は私を辱めようとしている……！

こんなことになるならルーカス様に抱かれていればよかった……。

「だが、婚約していたとはな。オレの方が先にお前を見つけたというのに……！」

「貴方と会ったのは、先の戦いが初めてです！ ルーカス様の方がずっと先です！」

「……やはり憶えてはいないのだな」

「な、何をですか？」

「まあ、いい。オレの目的は変わらない。お前をオレのモノにする」

「決してなりません！ 貴方のモノなどに――」
せめてもの抵抗として、アルカードをにらむ。

「その誇り、気位をオレがへし折ってやろう」
アルカードがゆっくりと近づいてくる。

よく見れば下半身にある男性の象徴がズボンの内側から尊大に天を衝いていた。

「ひっ」

そんなに大きくなるものなの!? 私の腕くらいあるんじゃないの!?

「間近で見ると、なおのこと美しい……」
アルカードが私の頬に手を添えて呟いた。

彼の紫水晶アメジストの瞳に吸い込まれそうになる。それくらい彼の顔立ちは整っている。

だめ。ルーカス様の方がカッコイイ。絶対そう。こんな魔族の皇子なんかより――。

「あっ………♡」

彼の繊細な指先が私の耳に触れた。穴をくすぐったり、耳たぶをぷにぷにと摘まんだりして遊んでいる。

「どうした？ 耳を弄られた程度で感じているのか？ 敏感だな。好ましいぞ」

「感じて、なんか、ない………！ ううっ………！ あっ♡」

アルカードが私を抱きしめ、首筋に吸いついた。

「やめっ♡ だめっ♡ 吸っちやだめなのっ♡ だめええ……！」

「そう言われてもやめるわけないだろう？ 十年だ。十年も待ったのだぞ？ んちゅっ、ちゅううう……！」

「十年……？ んんっ♡ 十年って、どういう……？ あああっ♡ だめっ、キスマーク、ついちやう♡ だめって言うてるのに……！」

十年前に私と彼の間で何かあったのだろうか。

でも、その頃の私は裁縫を憶え始めたばかりの少女だ。心当たりが全くない。

「キスマークを身体中につけてやろう。お前はオレのモノだと証明する

ためにな」

私が両手を上げた状態なのをいいことに、彼は二の腕の裏側へ吸いついた。

「あっ♡ そんなところ……！ だめですう……♡ やあんっ♡ だめっ♡ あああっ♡」

彼はそのまま口づけを繰り返しながら私の脇をぺろりと舐めた。

「ひあっ♡ そんなところ、汚いから……！」

「お前に汚いところなどない。オレはお前のどんな部位でもキスしよう。んちゅう……！」

「でも、汗、かいてる……！ 湯浴みもして、ない……！ あああ♡」

最後に湯浴みをしたのは数日前で、ここに連れてこられるまでに当然汗もかいている。

なのに、彼は夢中で私の脇を舐めていた。

ちゅっ♡ れろっ♡ れろれろお♡ んっ♡ れろれろれろお♡

「やめっ♡ だめっ♡ くさい♡ 絶対、匂う、から♡ だめええ♡♡」

「この匂いが愛しい。オレを欲望へと駆り立てるのだ。わかるだろう？」

「わかり、ま、せんんっ……!! あああ♡」

脇をひたすら舐められて身悶える私の股に、アルカードは片足を入れ
た。

いや、違う……!! これ、彼の……下半身のアレ……!!?

「うそ……!?　こんなに硬いの!?　鉄の棒みたい……あっ♡」
私の秘部に剛棒がぐいっと押しつけられる。

「あっ♡」

「ペニスを押しつけただけで甘い声を漏らすとは。敏感なのだな。そういうところも好ましいぞ」

彼を喜ばせたくて反応しているわけじゃないのに。

私はどうしても甘い声を上げてしまう。

「反対側の脇も舐めてやろう」

長いまつげを伏せて、甘えるように私の脇へと顔を埋めた。

れろれろっ♡　ちゅっ♡　れろお♡　んちゅっ♡　ちゅくっ♡　ちゅ

ぷっ♡ れろっ♡

「ひあ♡ あんっ♡ あああ♡ やめっ♡ だめっ♡」

私は両手を吊り上げられているせいで逆らうこともできない。

為すがままに脇をひたすら舐められるだけだ。

「ここを舐められるのは初めてか？」

「初めてに決まっています……！ あああ♡」

アルカードは脇に甘いキスとベロリと舐める行為を繰り返しながら、硬くなった股間のモノを押しつけてくる。

剛棒の先が私の秘部に擦れて、じんわりと甘い快感が伝わってきた。

「やめっ♡ 本当にだめっ♡ やっ♡ あああ♡ 当たる♡ 硬いの

が当たってるから♡」

「硬いモノだと？ 名前くらい知っているだろう？ それとも聖女だから卑猥な言葉は使えないというのか？」

「恥ずかしいから言いたく、ありま、せんんっ……！」

「ここには誰もいない。オレだけだ。恥ずかしがらずに言ってみろ」

芯は鉄の棒のように硬いけれど、先の方は柔らかくてぷにぷにしている。

私の秘部に強く押しつけてくるものだから下着越しに、その柔らかさがわかった。

「言わない……！ 誰が言うものですか……！」

「しっかりついたぞ、オレの印が」

「あああ……いやああ……」

「もっとつけてやらねばな」

ちゅっ♡ ちゅうう♡ んちゅっ♡ ちゅぷっ♡ ちゅううううう

♡

首筋、鎖骨、脇の下、二の腕、胸の谷間、上乳……と彼はキスを繰り返す、あらゆる場所へキスマークをつけていく。

「このローブが邪魔だ」

ビリイッ——！

「あっ！」

アルカードは私が着ていた純白のローブを引き裂いた。

「見惚れるほどに美しい乳房だ。乳首は薄い桃色でかわいらしいぞ」

「いやあ……見ないでえ……」

私はかろうじて最も大切な場所を下着一枚が隠しているのみ。

裸でいるのと、ほとんど同じだ。

「美しく、そして淫らだ。裸体のお前を前にして冷静でいられる男などいない」

「……知りません」

彼は瞬るような視線を私に浴びせ続ける。

そんな目で見られていると——身体が熱くなる。

お腹の奥がむずむずしてくる。

……何、これ？ 私の身体がおかしい。

見られているだけなのにどうして……。

「ククツ。身体がうずいてきたようだな。お前のオマンコが――」

「お、おま……！ そんな卑猥な言葉を使うなんてはしたない……！」

「必ずお前に言わせてやる。何度でも、懇願するように言わせてやるぞ」

「絶対に言いません！」

男性のモノと女性の秘部とその名前を言わせたがるなんて、何て悪趣味な。

「その気位の高さはオレ好みだが――」

気を抜けば見とれてしまいそうなくらい美しい顔立ちのアルカードが両手で私の胸をぐつとつかんだ。

「あっ♡」

私の意思とは関係なく甘い声を漏らしてしまう。

「初々しい反応だ。お前の初めてを全ていただこう」

ごつごつした男らしい両手が優しく私の乳房を揉みし抱く。

そう、優しい。もつと乱暴にされるかと思ったのに。

さつきもそうだ。

彼は甘いキスとベロリと舐める行為を繰り返して、私が悶える姿に興奮していた。

それは人を傷つける行為ではない。

淫魔の皇子ならば、もっと魔法や道具を使って女性をオモチャのように扱い、壊れるまで淫らな責め苦を味わわせるのだと思っていたのに。

大きな両手で私の乳房を包み込むように優しく揉み続ける。

だから、甘い刺激が何度も伝わってきて身をよじってしまう。

甘い声を、漏らしてしまおう——……。

「あっ……♡ やっ……♡ あああ……♡」

「感じているのか。嬉しいぞ」

「感じて、なんか……！ あっ♡」

彼は少しだけ力を込めて、乳房を強く揉んだ。

もちろん痛みはなく、ぎゅつと絞られる感触がむしろ心地よかった。

「まだ敏感なつぼみには触れていないというのに。お前はかわいいな」

「かわいくなんて……んっ♡ あっ♡」

「どんな魔族の女よりも、どんな貴族の女よりも、お前が最も美しい。

誰よりもかわいい。オレはそう思う」

どこか潤んだ瞳で、真っ直ぐに私を見つめながら顔を近づけてくる。

「ああ……来ないで……」

アルカードは何度か王都に現れたことがある。

人間界を征服しようとしている魔族。その頂点に立つ淫魔の皇子。憎

むべき相手なのに、その彼を見て貴族の女性たちは沸き立った。

今ならその気持ちかわかる。わかりたくないのにわかってしまう。

凄まじいまでの色気なのだ。

匂い立つような、美しいオーラまで見えてしまうような。

そんな彼に切なげな表情で見つめられたら、どんなことでも許してしまいたい。

その吐息が私の鼻先まで届いた。

甘い桃の香りのようで、気を抜けばとろんと意識が微睡みそうになる。

そして、彼の唇が近づく。

「いや……」

私は自分の頭上よりも高い位置に手首を縛り付けられている。

だから、顔を背けることしかできない。

けれど、アルカードは私のあごに指を添えて前を向かせた。

「お前を誰にも渡さない。オレだけのものだ。婚約者のことなど、極上の快楽で忘れさせてやる……」

ああ、そんな瞳で私を見ないで。

——ルーカス様。

「んっ♡」

唇が重なった。

意外にも柔らかく、そして温かい。

「……んくっ♡ ちゅ♡ ん♡ はっ♡ んちゅ♡ んんっ♡」

彼は私の唇をついばむように何度も短いキスを繰り返す。

くすぐったくて、ぞくぞくする。

これが淫魔の皇子のキス。

乱暴に唇を奪われるのかと思っていたのに、なんて甘くて優しいキス

なの……？

「ふあっ♡ んっ♡ ちゅう♡」

彼はキスを繰り返しながら私の身体をそっと抱きしめた。

「あっ♡♡」

包み込むように抱きしめられて、やっぱり甘い声が漏れてしまう。

両腕が拘束されていなければ、私からも抱きついてしまっていたかも

しない。

それくらいの恍惚感が身体の奥底から沸き上がってきた。

「まだ子供のようなキスしかしてないぞ？　なのに、これほど感じてくれるとはな。嬉しいぞ」

「……んっ♡　んちゅっ♡　はあ……これが子供のようなキス？　うそ

……」

充分に甘く淫らな口づけだと思っていた。

何度も何度も切なく求め合うキス。

これが兎戯にも等しい行為だなんて。

これよりももっと上があるだなんて――。

「キスだけでお前をイカせてやろう」

「やっ……！　これ以上はだめっ……！」

絶対に私、おかしくなる——……。

「んぷっ♡　んちゅっ♡　んんんっ♡♡♡」

アルカードの太い舌が私の口内に侵入してきた。

「ふあっ!?　あっ♡　ふあ♡」

「お前も舌を出せ。互いの舌で抱き合うのだ」

「ふっ、ふええ……♡　んぷっ!?」

言われたとおりに舌を出すと、彼の熱い舌が絡みついてきた。

とろとろした感触が背中を駆け抜け、身体が溶けてしまいそう。

「ぷあっ♡ はぷっ♡ れろっ♡ ちゅぷっ♡ んんっ♡♡ んぷっ♡♡♡ ぷあっ♡ はあ、はあ、はあ！ んぷっ!? んんっ♡♡♡♡」

息苦しくなって少し離れて、また口の中を彼の舌で蹂躪される。

アルカードは私の口の中で天井をくすぐるように舐め、舌の裏側を舐め、喉の奥まで淫靡ならではの長い舌を押し込んでくる。

互いの唾液が混じり合って、少し甘い蜂蜜のような味がした。

それはたぶん錯覚で、淫らなキスをしているからそう感じているだけ。でも、だからこそ、もっと欲しくなる。錯覚を本物だと思い込みたくて。

もっと彼の舌で私の口の中を犯して欲しい。

もつと彼の唾液が欲しい。

「オレの唾液は媚薬入りだからな。身体がうずいてきただろう？ お前のオマンコがオレのモノを求めているはずだ」

「いやっ……！ 卑猥な言葉を使わないで……んちゅっ♡ れろっ♡
ちゅっ♡ れろ♡ んぷう♡」

私は言葉責めを拒否しつつも、彼の濃密な大人のキスに応じる。

言葉と身体が完全に矛盾していた。

でも、こんなにも蕩けそうなキスをされたら、もつと彼を求めてしま
う。

「まだまだ激しくするぞ」

強引に唇を押しつけ、私の口内のさらに奥へ舌をねじ込んだ。

こんなに入ってくるの!?

まるで口の中が犯されているみたい……!

「んぷっ♡ れろれろっ♡♡♡♡♡ んちゅううう♡♡♡♡♡ ちゅぷっ♡♡♡♡♡
れろっ♡♡♡♡」

ああ、身体が溶ける……溶けちゃう……♡

「れろれろっ♡♡♡♡♡ れろお♡♡♡♡♡ んちゅ♡♡♡♡♡ ちゅぷう♡♡♡♡♡
ちゅっ、ちゅ♡♡♡♡」

もつと、もつと欲しい……!

「フフツ。貪るようなキスをもつととして欲しいのだろうか？」

「そ、それは……！」

「さあ、言え。オレに懇願しろ。お前達の世界で言う天国へ連れて行ってやろう」

「……………して、欲しい、です」

「聞こえないな？ フフ」

本当は聞こえているはずなのに、彼は意地悪にそう尋ね返す。

アルカードの蠱惑的な笑みを見ると、聖女の誇りが——揺らいで薄れて——……。

「……淫らなキスを、もっとして欲しいです」

「ならば、お前からキスをしてみせろ」

彼も私をぎゅっと抱きしめながら濃厚なキスに応じてくれる。

ああ、何て幸せなキスなの？

身体が浮いてしまいそうなくらい気持ちいい。

頭の中まで溶けてしまいそう。

いつまでもキスをしていたい。

そう思っているのに、彼は唇を離した。

「お前のオマンコはすっかり濡れているではないか」

「ああっ♡♡♡」

彼は私の下着の中に手を突っ込んで、私の割れ目を指で横様に開いた。見えなくても感触でそれがはつきりとわかる。

「この下着も不要だ」

ローブのように破られるかと思っただけで、彼はひざまずいて下着を
するりと脱がせた。

その瞬間だけ私を世話してくれる執事のように、かわいいなと思っ
てしまった。

だから、親近感が湧いてしまう。

それすらも計算ずくなのだろうか。

「お前の淫らなオマンコ汁が太ももを伝って流れ落ちているぞ」

「あつ……！ いやあ……！ 見ないで……！」

しかし、私は自分の股間を隠すこともできない。

わずかに内股にするだけだ。

けれど、彼はその内股の三角州へ片手を突っ込んだ。

「ひあっ♡」

おそらくは人差し指と薬指で私の割れ目を横様を開き、中指で膣穴の入り口をいじくり始めた。

「んあっ♡ あっ♡♡ だめ、だめえ♡♡♡ そんなごっごっした指、だめえ♡♡♡」

でも、指の腹はぷにぷにとして柔らかい。

だから、全然痛くなくて、くちゅくちゅと音が立つほど乱暴にいじられてるのに気持ちがいい。

「あっ♡ 指、入って、来る♡♡♡ だめっ♡ 入れちゃだめええ♡♡♡
♡」

「入り口を広げるだけだ。膜を破るほどは入れない。そこはオレのペニスで破るからな」

確かに彼が指で触れているのは入り口だけ。

ゆつくりと円を描きながら、私の膣穴が広げられていた。

「美しい胸の方もかわいがってやらなければな」

「あっ♡」

またさっきの優しい愛撫。

熱くて大きな手のひらで私の乳房を包み込み、ゆったりと揉みし抱く。

ぎゅつと握られても不思議と痛くない。

むしろ、圧迫感が心地よくて、やっぱり甘い声を漏らしてしまう。

「はっ♡ あああ♡♡ んはあんっ♡♡♡」

彼は乳房を揉みながら指先で乳首をぴんと弾いた。

「これだけ敏感なお前が乳首でどれほど感じるのか、楽しみだな」

「いやあ……♡♡♡」

彼は膣穴の入り口をいじくりながら指先で乳首をこね回す。

何これ、凄いいい……♡♡♡

下からは痺れるような刺激が、上からは甘い刺激が同時に伝わってきて、がくがくと脚が勝手に震える。

「お前は本当にかわいいな……。これほど敏感な女性は初めてだ。オレと相性が最高によいのだな」

「そんな、相性、なんて……。！ あああ……。♡♡♡ 乳首、こりこり、だめえ♡♡♡ んはあぁっ♡♡♡ んんっ♡♡♡」

「お前の喘ぎ顔も反応もたまらんな」

彼はそう呟いて、私の乳首にむしやぶりついた。

「ひああああ♡♡♡ やんっ♡ だめっ♡ らめっ♡ 乳首、しゅっちや、らめえ♡♡♡」

吸っちやだめと言おうとしてるのに感じ過ぎて呂律が回らない。

「らめなのにい♡♡♡ あああ♡♡♡ ちゅうちゅうしちやらめええ

♡♡♡
」

「こんなにも美味しい乳首を吸うなと言う方が無理だ。んちゅう」

次は反対側の突起物へ彼は吸いついた。

口の中で私の乳首を舌先で転がし、吸い上げ、甘い唇で優しく噛む。

「んああっ♡♡♡ そんな、優しいの、らめ♡♡♡ らめなのお♡♡♡

ひあっ♡♡♡」

彼はこうして私の乳首を辱めながらも、膣穴をずっといじり続けている。

お漏らししているみたいに淫らな液体が秘裂の奥から次々と流れ出ていた。

「オマンコのいやらしい水音も大きくなってきたな。もうずぶ濡れだぞ？」

「私のせい、じゃないっ♡ 貴方が私をを、いじる、からあ♡♡♡」

「どこをいじるからだと言うのだ？ 言ってみろ？」

……だめ。そんなに優しく問いかけないで。

「どうした？」

彼は宝石のような瞳で私を見つめて、再び優しく問いかける。

その声に包まれているような気分になる。

私を傷つける全てのものから守ってくれるような、そんな安心感さえ抱いてしまう。

ただ名前を呼ばれたただけなのに。

……言いたい。言って彼を喜ばせてあげたい。

「……お、オマ……ンコ、です」

「もつとはつきり聴かせてくれ。お前のかわいらしい声で」

そう言っつて彼は愛撫の手を止めた。

「あああ……意地悪う……♡ ちゃんと言います。だから、もつとして

ください……♡」

私は彼の吸い込まれそうな瞳を見つめて、胸をときめかせながら言っ
た。

「オマンコです。私のオマンコをもつといじつて、かわいがつてくださ